

二〇二二年九月一七日

竹春の奈落となりし切通し
秋扇少し扇いで仕舞ひけり
古希越えてなほ若手なる敬老日
夜神楽の間遠に聞こゆ村はずれ
秋暑し開かずの踏切やつと開く
真直ぐなるセコイア並木秋高し

二〇二二年九月一六日

藤壺のひしめく鉄鎖水澄めり
満開の萩越しに海展けけり
新走り女子組が占む立ち飲屋
秋思つく父の手擦れの歳時記に
心地よき秋日の匂ふシートかな

二〇二二年九月一五日

語らひの余韻さはやかペダルこぐ
向日葵の辞儀す重さを括りけり
走り根に蚊遣り香具師の忘れもの
砂丘ゆく駱駝の空を鳥渡る
秋天を映して深しにはたづみ
月光に山浮き彫りや鄙の里

二〇二二年九月一四日

犬も主も挨拶交はず園うらら
御吉野や時雨まとひて曼珠沙華
秋天を屏風としたる天守閣
雨だれの飽きぬリズムに秋惜しむ
露の岩不動明王彫られるて

素 秀

たか子

あひる

みきお

やよい

凡 士

やよい

こすもす

もとこ

みづき

む べ

あひる

みきお

なつき

凡 士

あひる

宏 虎

こすもす

あられ

たか子

明日香

明日香

明日香

明日香

段丘の高みを統ぶる秋桜

駅なかにお国訛りの林檎売

二〇二二年九月一三日

秋つばめ炊煙ひとつ峡の空
アイドル祈願記せる絵馬や小鳥くる
初秋刀魚骨も炙りて肴とす
飴せる普請の音や秋澄める
櫓門 節 穴に見ゆ秋湿り
音すれど見へぬ電車やすすき原
秋の夜や終活のことあれこれと
至福なる城見の句座や秋日和

二〇二二年九月一二日

城めぐる市民マラソン秋高し
一人居の夜長は私だけのもの
田の神さあ隠して稔る稲穂かな
秋の 朝 舟 の 影 ゆ く 湖 鏡
ふるさとの兄より届く甘き梨

二〇二二年九月一日

二階へと匂ふ新米炊き上がり
身に入むや残念石にくさび痕
初紅葉 天守に向かふ女坂
みささぎの露草の径たもとほる
朝雀また一羽来て木槿落つ

素 秀

凡 士

凡 士

なつき

素 秀

せいじ

たか子

こすもす

満 天

たか子

もとこ

はく子

みきお

隆 松

あひる

満 天

たか子

ぽんこ

せいじ

なつき

毎日句会みのる選・二〇二二年九月一九日